

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 『新編醉翁談録』の成書に関する一考察（一）：その編纂過程をめぐって |
| Author(s) | 孟, 夏 |
| Citation | 表現技術研究 , 15 : 37 - 53 |
| Issue Date | 2020-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | 10.15027/49074 |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049074 |
| Right | |
| Relation | |



『新編醉翁談録』の成書に関する一考察（一）

—その編纂過程をめぐって—

孟 夏

はじめに

『新編醉翁談録』（以下『醉翁談録』とする）は、宋末元初の頃に廬陵（現在の江西省吉安市）の羅燁という人物が編纂したとされる書物である。

この書物は甲から癸まで全十集、各集二巻、合計二十巻があり、甲集巻一には講釈に関する記載が収録され、それ以外の巻には主に宋以前の話が収録されている。従来からその甲集巻一所収の講釈に関する記載、特にその中に見られる講釈のジャンル、名目に関する記載は当時の講釈活動の研究における重要な資料であると考えられていたため、『醉翁談録』と語り物との関連性に関する先行研究は複数見られる⁽¹⁾。しかし、『醉翁談録』そのものに関する研究、特にその本文に注目するものは少なく、例えば編纂過程や編纂意図などの、『醉翁談録』の成書に関する問題については、いまだ不明な点が多い。

『醉翁談録』の内容を検討していくと、その中には、前代あるいは同時代の作品の類話・同話が多く見られることがわかる⁽²⁾。筆者は以前『醉翁談録』所収の全作品について、類話・同話を調査して整理

し、拙稿「『新編醉翁談録』の描写の特徴について」（『中国中世文学研究』第六九号、二〇一七年）の末尾に表の形で付した。これにより、『醉翁談録』にしか見られない話は少数で、多くの場合は他の書物に似たような話、もしくはほとんど同じ話が収められていることが明らかとなった。

さらに、それらの同話と比較してみると、話の筋だけでなく、文字まで一致しているものもあることがわかる。例えば小松建男氏は『醉翁談録』、『太平広記』、『類説』⁽³⁾、『緑窓新話』⁽⁴⁾の四つの書物の中に収録される唐の伝奇小説（封陟、裴航、柳毅、李娃、柳氏、無双の話）を取り上げ、主に「封陟」の話为例として四つの書物所収の話の文字の比較を行っている。その結果、『類説』と『醉翁談録』の文字が近かったことから、この二書の祖本が存在しているとし、さらにその祖本の形は『太平広記』所収の話の文字とは異なっていると指摘する⁽⁵⁾。ここから、羅燁は書物を編纂する際に何らかの書物を参考にしたことがわかる。しかし、『醉翁談録』には小松氏が指摘する六篇以外にも他の書物と文字が一致する話が複数見られる。それらの話はどのような状況になっているのか、それらの話から『醉翁談録』

が使用した書物が明らかになるのかどうかなどについては、小松氏は言及していない。

小松氏はさらに、「『類説』は、この祖本を更に簡略化する傾向があり、『酔翁談録』は祖本の本文を削除することは少ない」と指摘する(6)。つまり、『酔翁談録』にはより詳細な話が残されているということがある。筆者はすでに、「廬陵羅燁」という編者に関する情報や、「酔翁」、「談録」という書名に着目して調査を行い、『酔翁談録』は、文人であった羅燁が、廬陵地方の文化環境の影響を受け、文人たちの宴席の場で語られた話を記録したものであることを指摘した(7)。小松氏の調査と合わせて考えれば、羅燁は単に文人たちの談論を記録しただけではなく、そこで語られたネタを、既存の書物のなかから探しだし、より詳細に記録したものと考えられる。しかし、羅燁が何のためにこのような書物を編纂したのかについては、よくわからない。

そこでまず本稿では、『酔翁談録』に収録された同話が見られるすべての話を取り上げ、他の書物の文字と比較することによって、羅燁が具体的にどのような書物を使用したのか、どのように編纂したのかという問題を考えてみたい。

一 『酔翁談録』が使用したテキスト

まず、小松建男氏が指摘した六篇以外の話はどのような状況になっているかという問題について検討してみたい。小松氏が取り上げた六

篇の文字は『類説』と近く、『太平広記』とは異なるが、実はその文字が『太平広記』と近く、『類説』と異なる話も存在する。例えば己集卷二「遇仙奇会・郭翰感織女為妻」（以下「郭翰」とする）は後者である。以下では、まず『酔翁談録』と『太平広記』所収の話を挙げる。

『酔翁談録』己集卷二「遇仙奇会・郭翰感織女為妻」

太原郭翰、少簡貴、有清標、姿度秀美、善談論、工草隸。孤独处一室、甚瀟灑。当盛暑、乘月臥庭中、時有微風、稍聞香氣漸濃、翰甚怪之。

『太平広記』卷六八引『靈怪集』（談刻本）(8)。

太原郭翰、少簡貴、有清標、姿度美秀、善談論、工草隸。早孤独処、当盛暑、乘月臥庭中、時有清風、稍聞香氣漸濃。翰甚怪之。

傍線を引いた箇所は両書の文字が一致する箇所であり、波線は文字異同が見られる箇所である（以下同じ）。ここでは、この両書の文字はほとんど一致する。しかし、波線を引いた『酔翁談録』に見られる「孤独処一室甚瀟灑」の八文字は、『太平広記』には「早孤独処」とあり、『酔翁談録』の方がより記述が詳細である。この話について、『類説』所収のものはかなり簡略であり、以下に挙げたものが全文である。またこれは『紺珠集』所収のものほとんど一致している(9)。

『類説』卷三七引『神異経』（明天啓本）

郭翰遇織女降其室、衣玄綃之衣、霜羅之帔、戴翹鳳之冠、躡瓊元

之履、張丹轂之幘、施九晶玉華之簪、軛会風之扇、有同心龍枕。
翰曰、「牽牛郎何在。」曰、「河漢阻隔、不復相聞。」翌日、丹
鉛書青縑一幅、以寄翰。

『紺珠集』卷五引『神異經』（明天順本）

郭翰嘗遇織女降其室、衣玄綃之衣、霜羅之帔、戴翹鳳金冠、履瓊
文九章履、張霜霧丹轂之幘、施九晶玉華之簪、軛会風之扇、有同
心龍枕。翌日、丹松⁽¹⁰⁾書青縑一幅、以寄翰。（「会風扇」条）

翰曰、「牽牛郎何在。」女曰、「河漢阻隔、不復相聞。」（「牽
牛郎何在」条）

ここから、『紺珠集』と『類説』所収の話の場面は順序が一致しない
箇所も見られるが、いずれも出典は『神異經』と注記され、文字もほ
ぼ一致することがわかる。『類説』と『紺珠集』の両書には、この話
以外にも文字が一致する場面が多いため、従来、両書は踏襲関係があ
り、特に『類説』はしばしば『紺珠集』を踏襲したものと考えられる⁽¹¹⁾。
つまり、『類説』所収のこの話の祖本には二つの可能性があると考え
られる。一つは、『類説』と『紺珠集』はいずれも『神異經』から引
用し、文字がほぼ一致するのは『神異經』所収の「郭翰」の話が元々
このような簡略な形であったということである。もう一つは、『類説』
は直接『紺珠集』から引用したということである。いずれにしても、
『類説』所収の「郭翰」の話は『太平広記』と『醉翁談録』所収のも
のとは系統が異なると考えられる。つまり『醉翁談録』所収の「郭翰」
は、『類説』所収の「郭翰」の話とは系統が異なり、『太平広記』所
収の「郭翰」に近いこと、さらに『太平広記』に比べ、『醉翁談録』の

方がより詳細であることがわかる⁽¹²⁾。「郭翰」の状況と類似する話
は、もう一つ見られる。己集卷二「遇仙奇会・趙旭得青童君為妻」で
ある。「郭翰」と同様に、『類説』に収録されたものはかなり簡略化
されている。

『類説』卷六〇「拾遺類総」

趙旭幽居広陵、有女子衣六銖霧綃之衣、躡五色連文之履、云、「吾
天上青童也。運数当与郎偶。」中夜、又聞外有一女呼「青夫人」、
扣柱歌⁽¹³⁾曰、「月露飄飄星漢斜、独行窈窕浮雲車。仙郎独邀青
童君、結情羅帳連心花⁽¹⁴⁾。」旭起、迎之曰、「吾娥媚也、聞君
青童会集、故捕逃耳。」既別、授以隱訣、大要以心死可以長生、
保精可以致神。

ここで挙げたのは、『類説』所収の全文であり、話のあらすじしか残
っていない。一方で、『醉翁談録』と『太平広記』の話の記述は詳細
である（以下はその一部である）。

『醉翁談録』己集卷二「遇仙奇会・趙旭得青童君為妻」

天水趙旭、字子明、少孤介好学、有姿貌、善清談、習黃帝、老子
之道。家於広陵、獨嘗幽居、惟二奴侍側。嘗夢一女子、衣青衣、
挑笑於牖間。及覺無見、異之。因祝曰、「是何靈異、願睹仙姿。」
是夕、近一更許、忽聞窓外切切笑声。

『太平広記』卷六五引『通幽記』

天水趙旭、少孤介好学、有姿貌、善清言、習黃老之道。家於広陵、

嘗獨茸幽居、唯二奴侍側。嘗夢一女子、衣青衣、挑笑闢間。及覺而異之、因祝曰、「是何靈異、願覲仙姿、幸賜神契。」夜半、忽聞窗外切切笑聲。

この例からも、『醉翁談録』と『太平広記』の文字はほとんど一致し、『醉翁談録』の方がより詳しいという傾向が見られる。例えば「字子明」三文字は『太平広記』には見られず、「及覺無見、異之」の箇所は、『太平広記』は「及覺而異之」に作り、「是夕、近一更許」の箇所は『太平広記』は「夜半」に作る。必ずしもすべての箇所において『醉翁談録』の方が詳しいとは言えないものの（例えば二重傍線を引いたように、『醉翁談録』の「是何靈異、願睹仙姿」の箇所は『太平広記』は、「是何靈異、願覲仙姿、幸賜神契」に作る）、『醉翁談録』が『太平広記』より詳しい箇所の方が多く確認できる。ここから、『醉翁談録』には『太平広記』あるいは『太平広記』が引用した『通幽記』が利用され、文字はより詳しい傾向にあることが指摘できる。『醉翁談録』の文字は『太平広記』以外に、『古注蒙求』などの書物との類似も見られる¹⁵⁾。例えば辛集卷一「神仙嘉会・劉阮遇仙女於天台山」と他の書物に見られる同話との文字の異同状況は、以下のようである。

『醉翁談録』辛集卷一「神仙嘉会・劉阮遇仙女於天台山」
剡県有劉晨、阮肇二人、入天台山採藥、迷失道路。糧尽、望山頭有桃、共取食之。便覺稍健、乃下山澗飲水、見蔓菁菜、及有一杯流出、中有胡麻飯屑。二人相語曰、「此去人不遠。」

『古注蒙求』卷中引『続齊諧記』（応安頃刊五山版）
漢明帝永平中、剡県有劉晨、阮肇、入天台山採藥、迷失道路。糧尽、望山頭有桃、共取食之。如覺少健、下山得澗水、飲之、並澡洗。望見蔓菁菜、從山復出。次有一杯流出、中有胡麻飯屑。二人相謂曰、「去人不遠。」

『太平広記』卷六一引『神仙記』¹⁶⁾
劉晨、阮肇、天台採藥、遠不得返、經十三日飢。遙望山上有桃樹子熟、遂躋險援葛至其下、啖數枚、飢止体充。欲下山、以杯取水、見蕪菁菜流下、甚鮮妍。復有一杯流下、有胡麻飯焉。乃相謂曰、「此近人矣。」

『太平御覽』卷四一引『通幽記』（四部叢刊本）
漢明帝永平五年、剡県劉晨、阮肇共入天台山取穀皮、迷不得返。經十余日、糧食之尽、飢餒殆死。遙望山上一桃樹、大有子実、而絶岩遂澗、了無登路。攀葛乃得至、啖數枚、而飢止体充、復下山持杯取水、欲盥漱、見蕪菁菜從山腹流出、甚鮮新。復一杯流出、有胡麻糝。相謂曰、「此必去人徑不遠。」

ここでは、『醉翁談録』所収の話の文字は『蒙求』と類似し、『蒙求』よりやや簡略化されており（例えば二重傍線を引いた『蒙求』に見られる「漢明帝永平中」「飲之並澡洗」「從山復出」などの文字は、『醉翁談録』には見られない）、一方『太平広記』や『太平御覽』の文字とは大きな違いが見られる。『醉翁談録』と『蒙求』の文字が類似する箇所はもう一つある。

『醉翁談録』庚集卷一「閨房賢淑・道韞才弁」

謝道韞、王凝之妻、有才弁。叔父安嘗問、「『詩』何句最佳。」道韞稱、「吉甫作頌、穆如清風。仲山甫永懷以慰其心。」安謂其雅人深致。嘗內集、俄而雪下、安曰、「何所似也。」安兄子朗曰、「撒塩空中差可擬。」道韞曰、「未若柳絮因風起。」安大悅。凝之弟猷之、嘗與賓客談論、詞理將屈、道韞婢白猷之曰、「欲為小郎解困。」乃施素綾步障自蔽、猷之前議、客不能屈。

『蒙求』卷上「謝女解困」（国立故宮博物院藏上卷古鈔本）

『晋書』王凝之妻謝氏、字道韞、聰識有才弁。叔父安嘗問、「『詩』何句最佳。」道韞稱、「吉甫作誦、穆如清風。仲山甫永懷以慰其心。」安謂有雅人深致。又嘗內集、俄而雪驟下、安曰、「何所似也。」安兄子朗曰、「散塩空中差可擬。」道韞曰、「未若柳絮因風起。」安大悅。凝之弟猷之、嘗與賓客談議、詞理將屈、道韞遣婢白猷之曰、「欲為小郎解困。」乃施青綾步障自蔽、猷之前議、客不能屈。

この話を見ると、両書の文字はほぼ一致し、冒頭の箇所は、『醉翁談録』は「謝道韞、王凝之妻、有才弁」、『蒙求』は「王凝之妻謝氏、字道韞、聰識有才弁」に作り、「聰識」という情報は『醉翁談録』には見られず、『蒙求』の方がより詳細であることがわかる。一方、『蒙求』の注記から、この話は『晋書』から引用されたことがわかるが、『晋書』に載録される謝道韞の話は、『蒙求』とは違いが見られる。

『晋書』卷九六「列女伝」に収められる謝道韞の話の中には、謝道韞が叔父謝安と『詩経』を討論した、雪を柳絮に喩えた、夫の家族に

ついて議論を行った、謝玄の学問が進歩しないのを風刺した、王猷之を助けて客との論争に勝ったという五つの逸話が見られるが、『蒙求』は一番目、二番目と五番目の話を合わせて記録する。さらに、謝道韞の話は他の書物、例えば『世説新語』などにも記録されているが、これらの書物に所収されたものはいくつかの逸話を合わせて一つの話として記録するという形をとってはならず、文字にも大きな違いが見られる。

ここから、『蒙求』の編者は『晋書』を参考にし、『晋書』の話を選択して組み合わせることで記録したことが窺える（当然、『蒙求』以前にそのような形の書物が存在した可能性も否定はできないが、今は措く）。したがって、『醉翁談録』の文字が『蒙求』と一致するのは、編者羅燁が直接『蒙求』を参考にしたためである可能性が高いと考えられる。

以上のように、『醉翁談録』所収の話において、他の書物の文字と一致する場合と一致しない場合とを調べることによって、出典とされる書物或いは編者が参照した書物の一端が窺えた。そこで、このような話について、次の頁で挙げた【表】にまとめた⁽¹⁷⁾。この表から、『醉翁談録』は『類説』所収の文字と類似する話が最も多いが、その『類説』の話には出典の偏りが見られることがわかる。例えば②「薛昭娶雲容為妻」、④「封陟不從仙姝命」、⑧「裴航遇雲英於藍橋」の三つの話は、いずれも『類説』所収の文字と節略化の傾向が類似している事から、この二つの書物は踏襲関係にあるか、もしくは同じ祖本を使用した可能性があると考えられる。しかし小松氏によってすでに指摘されるように、前者の可能性は低い⁽¹⁸⁾。『類説』によれ

【表】

| 番号 | 『酔翁談録』所収の話 | 『酔翁談録』所収の話の文字と近い書物 | 他の書物に見られる同話 |
|----|-----------------------|---------------------------------|--|
| ① | 己集巻二「遇仙奇会・趙旭得青童君為妻」 | 『太平広記』巻六五引『通幽記』 | 『類説』巻六〇「拾遺類総」 |
| ② | 己集巻二「遇仙奇会・薛昭娶雲容為妻」 | 『類説』巻三二引『伝奇』 | 『太平広記』巻六九引『伝奇』 |
| ③ | 己集巻二「遇仙奇会・郭翰感織女為妻」 | 『太平広記』巻六八引『靈怪集』 | 『類説』巻三七引『神異経』 『紺珠集』巻五引『神異経』 |
| ④ | 己集巻二「遇仙奇会・封陟不従仙姝命」 | 『類説』巻三二引『伝奇』 『緑窓新話』巻上引『伝奇』 | 『太平広記』巻六八引『伝奇』 |
| ⑤ | 庚集巻一「閨房賢淑・道韞才弁」 | 『蒙求』引『晋書』 | 『晋書』巻九六「列女伝」 『世説新語』「言語第二」 |
| ⑥ | 辛集巻一「神仙嘉会・柳毅伝書遇洞庭水仙女」 | 『類説』巻二八引『異聞集』 『緑窓新話』巻上 | 『太平広記』巻四二〇引『異聞集』 |
| ⑦ | 辛集巻一「神仙嘉会・劉阮遇仙女於天台山」 | 『蒙求』引『続齊諧記』 | 『太平広記』巻六一引『神仙記』（明抄本注に「出『搜神記』」） 『太平御覧』巻第四一引『幽明録』、巻第八六二引『続齊諧記』 『類説』巻六引『伝記』 |
| ⑧ | 辛集巻一「神仙嘉会・裴航遇雲英於藍橋」 | 『類説』巻三二引『伝奇』 『緑窓新話』巻上引『伝奇』 | 『太平広記』巻五〇引『伝奇』 |
| ⑨ | 癸集巻一「重円故事・無双王仙客終諧」 | 『類説』巻二九引『麗情集』 『緑窓新話』巻上引『麗情集』 | 『太平広記』巻四八六「無双伝」 |
| ⑩ | 癸集巻一「不負心類・李亜仙不負鄭元和」 | 『類説』巻二八引『異聞集』 『緑窓新話』巻下 | 『太平広記』四八四「李娃伝」 |
| ⑪ | 癸集巻二「重円故事・韓翃柳氏遠離再会」 | 『類説』巻二八引『異聞集』 | 『太平広記』巻四八五「柳氏伝」 唐・孟棨『本事詩』 『緑窓新話』巻上引『異志』 |

ば、この三話の出典はすべて『伝奇』である⁽¹⁹⁾。これは偶然ではないと考えられる。恐らく『類説』の編者曾慥と『醉翁談録』の編者羅燁は、同じ祖本、つまり当時流布していた『伝奇』を見たのではないだろうか⁽²⁰⁾。同様に、⑥「柳毅伝書遇洞庭水仙女」、⑩「李亜仙不負鄭元和」、⑪「韓翃柳氏遠離再会」の三話は、『類説』には『異聞集』から引いたと書かれている⁽²¹⁾。このことと『類説』、『醉翁談録』所収の該当する話の文字状況は前述の『伝奇』とかなり類似することから、『類説』、『醉翁談録』両書の編者が『異聞集』所収の話を収録する場合も、同じ祖本を使用し、その祖本の文字は『異聞集』より節略されていると推測できる⁽²²⁾。また、⑨「重円故事・無双王仙客終諧」について、『類説』、『緑窓新話』には『麗情集』から引かれると記され、その話の文字を比較すると、二書の間で踏襲関係がないことがわかることから、それらの編者は同じ系統の祖本(『麗情集』)を参考にしたと考えられる。そうであれば、『醉翁談録』の文字が『類説』などと近く、文字がより詳細である箇所がしばしば見られるのは、羅燁も『麗情集』を使用したためである可能性が考えられよう⁽²³⁾。

以上の他にも、①「遇仙奇会・趙旭得青童君為妻」、③「遇仙奇会・郭翰感織女為妻」はそれぞれ『太平広記』巻六五に引かれた『通幽記』、巻六八に引かれた『靈怪集』と文字がほぼ一致する。この二話の文字について、『醉翁談録』の方がより詳細であるという傾向が見られるが、増えた文字は多くない。すると、この二話の祖本については、二つの可能性が考えられる。一つは、文字がより詳細であることから、羅燁は当時の『通幽記』⁽²⁴⁾、『靈怪集』そのもの(あるいは該当する話をほぼすべて収録する書物)を使用したという可能性であ

る⁽²⁵⁾。もう一つは、『醉翁談録』甲集巻一に「幼習『太平広記』、長攻歴代史書(若い頃には『太平広記』を習い、成人したら歴代の史書を修める)」という記述が見られることから、羅燁は当時流布していた『太平広記』の内容の一部を見ており⁽²⁶⁾、現在の『太平広記』に比べて詳細である箇所は、羅燁が見た『太平広記』にあつた描写である可能性である。

ここからわかるのは、羅燁が『醉翁談録』を編纂する際、複数の書物を参考にしたということ、またそれらに対してあまり削除や加筆を施さなかったのではないか、ということである。

二 『醉翁談録』の編纂方法

以上、『醉翁談録』所収の話の文字には『太平広記』や『類説』などの書物の文字と一致する箇所が見られることから、『醉翁談録』とこれらの書物の間には踏襲関係がある、あるいは同じ系統の祖本を用いたことがわかった。その一方で、『醉翁談録』所収の話には、参考としたであろう書物とは文字が大きく異なるものも見られる。まず⑧辛集巻一「神仙嘉会類・裴航遇雲英於藍橋」(以下「裴航」とする)の文字を検討してみたい。ここでは、『太平広記』、『類説』、『緑窓新話』を取り上げて比較を行う。前節の検討を踏まえれば、羅燁は『類説』の編者曾慥と同様に、当時流布している『伝奇』を用いた可能性が高いため、『醉翁談録』と『類説』の文字が最も近いことは確かであろう。

『醉翁談録』 辛集卷一 「神仙嘉会・裴航遇雲英於藍橋」

夫人曰、「妾有夫在漢南、幸無以諧諛為意。然亦与郎君有小小因縁、他日必得為姻懿。」

『太平広記』 卷五〇引『伝奇』

夫人曰、「妾有夫在漢南、将欲棄官而幽棲岩谷、召某一訣耳。深哀草擾、慮不及期、豈更有情留盼他人。的不然耶、但喜与郎君同舟共濟、無以諧諛為意耳。」

『類説』 卷三二引『伝奇』

夫人曰、「妾有夫在漢南、幸無以諧諛為意。縁郎君小有因縁、他日必為姻懿。」

『緑窓新話』 卷上引『伝奇』 (古典文学出版社、一九五七年)

夫人曰、「幸無諧諛、与郎君少有姻縁、他日必為配偶。」

右の箇所では、傍線を引いたように(傍線は同じ場面を描写する箇所。以下同じ)、『醉翁談録』、『類説』、『緑窓新話』の三書には「然亦与郎君有小小因縁、他日必得為姻懿」に類する描写が見られるが、『太平広記』にはそもそもこの文言が見られない。ここから、やはり『醉翁談録』、『類説』は同じ系統の祖本を使用した可能性が高いことが確認できる。しかし、この話の他の箇所を比較してみると、『類説』、『緑窓新話』とは異なる箇所が、『醉翁談録』には見られる。

『醉翁談録』

後使裊煙持詩一首答航、詩曰、「一飲瓊漿百感生、玄霜搗尽見雲

英、藍橋便是神仙宅、何必崎嶇上玉京。」航覽詩、不曉其意、後更不復見。航遂飾装婦輦下、道經過藍橋駅、偶渴甚、遂下馬求漿而飲。見一茅舍、低而隘、有老嫗緝綴麻苧。航揖之、求漿。

『太平広記』

夫人後使裊煙持詩一章曰、「一飲瓊漿百感生、玄霜搗尽見雲英。藍橋便是神仙窟、何必崎嶇上玉清。」航覽之。空愧佩而已、然亦不能洞達詩之旨趣。後更不復見、但使裊煙達寒暄而已。遂低囊漢、与使婢挈妝匳、不告辞而去、人不能知其所造。航遍求訪之。滅跡匿形、竟無蹤兆。遂飾妝婦輦下。經藍橋駅側近、因渴甚、遂下道求漿而飲。見茅屋三四間、低而復隘、有老嫗緝麻苧。航揖之求漿。

『類説』

答詩曰、「一飲瓊漿百感生、玄霜搗尽見雲英、藍橋便是神仙窟、何必崎嶇上玉京。」後經藍橋駅、渴甚。茅舍老嫗緝麻、航揖之、求漿。

『緑窓新話』

答詩曰、「一飲瓊漿百感生、玄霜搗尽見雲英、藍橋便是神仙宅、何必区区上玉京。」後經藍橋駅、渴甚。茅舍老嫗緝麻、航揖之、求漿。

ここで、『醉翁談録』に見られる傍線部「航覽詩、不曉其意、後更不復見。航遂飾装婦輦下、道經過藍橋駅、偶渴甚、遂下馬求漿而飲。見一茅舍、低而隘、有老嫗緝綴麻苧。航揖之、求漿」に注目すると、『類説』と『緑窓新話』の二書における該当部分の文字は完全に一致しており、『醉翁談録』より簡略化されている。『類説』と『緑窓新話』

の文字が一致している背景には、二つの可能性がある。一つは両書が参考にした祖本をそのまま引用している可能性であり、もう一つは成立年代が早い『類説』を『緑窓新話』が直接踏襲した可能性である。しかし実際、『類説』と『緑窓新話』の他の箇所^①の文字には、記述が一致しない箇所もある。次の例を見てみよう。

『醉翁談録』

嫗呼曰、「雲英、擊一甌漿来。郎君要飲。」航訝之、因憶夫人「雲英」之句。俄於葦箔之中、出双玉手、授瓷甌。航接飲之、真玉液也。

『太平広記』

嫗咄曰、「雲英、擊一甌漿来、郎君要飲。」航訝之、憶樊夫人詩有「雲英」之句、深不自会。俄於葦箔之下、出双玉手捧瓷、航接飲之、真玉液也。

『類説』

嫗曰、「雲英、擊一甌漿来。」航飲之、真玉液也。航謂嫗曰、「小娘子艶麗驚人、願娶如何。」

『緑窓新話』

嫗曰、「雲英、擊一甌漿来。」航飲之、真玉液也。航憶樊夫人「雲英」之句、謂嫗曰、「小娘子艶麗驚人、願娶可乎。」

『緑窓新話』に見られる傍線部「航憶樊夫人『雲英』之句」は、『醉翁談録』、『太平広記』には該当箇所が見られるが、『類説』には見られない。ここから、『緑窓新話』は、直接『類説』から話を引用し

たのではないことがわかる。この二書に文字が一致する箇所が数多く見られるのは、二書の編者がともに同じ祖本を参考にしたからであると考えられる。前文にあげた箇所^②で、『類説』と『緑窓新話』はいずれも「後経藍橋駅、渴甚。茅舍老嫗緝麻、航揖之、求漿」と作ることから、祖本の中では元々この形であったと推測できる。しかし、この箇所は、『醉翁談録』では上述のように祖本『伝奇』の文字より詳細である。さらに、『太平広記』の文字と比較すると、すべてが一致するわけではないものの、その流れや、大体の文字が一致することから、この箇所は、祖本の記述をそのまま引用したのではなく、かといつて羅燁自身が創作したわけでもなく、祖本に基づきつつも、複数の書物（ここでいえば『太平広記』）から記述を集めてつなぎ合わせた可能性が考えられる。こうした話は、他にもいくつか見られる。例えば③『癸集卷一「重円故事・無双王仙客終諧」』（以下「無双」とする）が挙げられる。この話の文字の状況は、「裴航」の文字の状況と同様、祖本『麗情集』と類似する箇所が見られ、また『太平広記』と類似する箇所も見られる。例えば『醉翁談録』などの四書には、

『醉翁談録』癸集卷一「重円故事・無双王仙客終諧」

振有女曰無双、幼稚戲弄相狎。振妻戲呼仙客為王郎子。後無双長成、舅氏以位尊頭、欲廢旧約。

『太平広記』卷四八六「無双伝」

震有女曰無双、小仙客数歳、皆幼稚、戲弄相狎。震之妻常戲呼仙客為王郎子。如是者凡数歳、而震奉孀姉及撫仙客尤至。一旦、王氏姉疾、且重、召震約曰、「我一子、念之可知也、恨不見其婚室。

無双端麗聡慧、我深念之。異日無令帰他族、我以仙客為托。爾誠許我、瞑目無所恨也。」震曰、「姉宜安靜自頤養、無以他事自撓。」其姉竟不痊。仙客護喪、歸葬襄鄧。服闋、思念「身世孤子如此、宜求婚娶、以広後嗣。無双長成矣。我舅氏豈以位尊官顯而廢旧約耶。」於是飾裝抵京師。時震為尚書租庸使、門館赫奕、冠蓋填塞。仙客既覲、置於學舍、弟子為伍。舅甥之分、依然如故、但寂然不聞選取之議。

『類説』卷二九引『麗情集』

振有女曰無双、幼与戯弄相雅。振妻戯呼仙客為王郎子。後無双長成、舅氏以位尊顯、欲廢前約。

『緑窓新話』卷上引『麗情集』

有女曰無双、幼稚戲狎。常呼仙客為王郎。後無双長成、舅氏欲廢前約。

とある。この箇所については、『太平広記』の文字が最も詳細で、『醉翁談録』『類説』『緑窓新話』三書の文字との間に大きな異同が見られ、三書の内では『醉翁談録』と『類説』の文字が最も類似する。ここから、『醉翁談録』と『類説』は同じ祖本、つまり『麗情集』を使用したと推測できる。しかし一方で、この四書には、次のような異同も見られる。

『醉翁談録』

言訖、拳刃。仙客救之不及、頭已落矣。仙客蓋覆其屍訖。天未明、発去。歴西蜀下峽、寓居於渚宮、悄不聞京兆之耗。遂帰襄陽別業、

与無双偕老矣。

『太平広記』

言訖、拳刃、仙客救之、頭已落矣。遂並屍蓋覆訖。未明発、歴四蜀下峽、寓居於渚宮、悄不聞京兆之耗。乃挈家帰襄鄧別業、与無双偕老矣、男女成群。

『類説』

言訖、拳刃⁽²⁷⁾而死。仙客挈無双、変姓名、帰襄陽諧老。

『緑窓新話』

乃自刎。仙客挈無双、変姓名、帰襄陽諧老焉。

この例の中で、『醉翁談録』に見られる傍線部「仙客蓋覆其屍訖。天未明、発去。歴西蜀下峽、寓居於渚宮、悄不聞京兆之耗。遂帰襄陽別業、与無双偕老矣」について、『類説』と『緑窓新話』はいずれも「仙客挈無双、変姓名、帰襄陽諧老(焉)」に作り、文字はほぼ一致する。一方、『醉翁談録』において二書と文字が異なる箇所は、『太平広記』と類似する。ここから、「無双」の話も、編者羅燁が『麗情集』だけを参考にしたのではなく、他のもの(ここでも『太平広記』か)も参考にして、その内容を補ったと考えられる。同様の例は、⑥辛集巻一「神仙嘉会・柳毅伝書遇洞庭水仙女」や⑩癸集巻一「不負心類・李亜仙不負鄭元和」などにも見られる。

以上のことから、羅燁は『醉翁談録』を編纂する際、複数の書物、特に一つの話に対してしばしば二種類以上の書物を参考にし、部分的に情報を増補して、より完成度の高い話を収録しようとしたものと考えられる。

三 『酔翁談録』の加筆について

一方、祖本と異なる文字のすべてが現存する他の書物の中に見られるわけではない。こうした箇所は多くはないが、ある傾向が認められる。小松氏はこうした箇所について、編者自身によって増補されたものであり、これらの箇所の多くは会話を豊富にしたり、より鮮明な人物像を作り出したりするという働きを持つと指摘する⁽²⁸⁾。

実際、筆者がこれらの箇所を検討したところ、『酔翁談録』で文字が削除された箇所は極めて少なく、逆に『酔翁談録』にしか見られない文字は、小松氏が指摘する点以外にも、「(一) 他の書物よりも白話的な表現となっていること」、「(二) 登場人物に関する情報がより具体的であること」、「(三) 話の結末に違いが見られ、記述がより詳しく、表現が豊かになっていること」などの傾向が見られ、さらに「(四) 情愛に関する描写が見られること」がわかった⁽²⁹⁾。ここでは特に、「(一) 他の書物よりも白話的な表現となっていること」に注目したい。例えば、

『酔翁談録』己集卷二「遇仙奇会・薛昭娶雲容為妻」

有田山叟者、見昭有道骨、贈菓一粒曰、「東去不独逃難、兼獲美麗仙女。」

とある。太字で示した「兼獲美麗仙女」は、『類説』は「兼獲美妹」に作り、『太平広記』は「当獲美妹」に作る。それ以外の文献を確認してみると、白話の作品では、「美妹」という表現がほとんど用いら

れず、「美麗」「仙女」、あるいは「美麗十人物（美麗少年、美麗女子など）」というような表現がよく見られ、逆に文言の作品では、「美妹」のような表現がよく見られ、「美麗十人物」のような表現はほとんど見られない。ここから、この一句の表現は『類説』と『太平広記』二書と比べると『酔翁談録』の方がより白話的であると言える。こうした箇所はそれ以外にも見られる。例えば前文で挙げた例には、

『酔翁談録』辛集卷一「神仙嘉会・裴航遇雲英於藍橋」

夫人曰、「……然亦与郎君有小小因縁、他日必得為姻懿。」

とある。ここでの「有小小因縁」も、『太平広記』には類似する表現が見られず、『類説』と『緑窓新話』はそれぞれ「小有因縁」、「小有因縁」に作る。二書と比べると『酔翁談録』の方がより白話的であることがわかる。さらに、本稿で挙げた例には、

『酔翁談録』己集卷二「遇仙奇会・趙旭得青童君為妻」

天水趙旭、字子明、少孤介好学、有姿貌、善清談、習黄帝、老子之道。

とある。太字で示した箇所、「習黄帝老子之道」について、『太平広記』は「習黄老之道」に作ることから、ここでも『酔翁談録』の方がよりわかりやすい表現になっていることがわかる。

以上のことから、『酔翁談録』の編者は書物を編纂する際、既存の書物に基づき、明らかな「脚色」は控えつつも、表現を白話的にする

など、特に話をわかりやすくする点において工夫をしたことが指摘できよう。

おわりに

本稿では、『酔翁談録』に収録された話の中で、同時代の他の書物に同話が見られる話を取り上げ、文字の異同を細かく検討することによって、『酔翁談録』の成書に関する問題のうち、編纂過程について考察を行った。

『酔翁談録』の編纂に利用された書物については、小松氏の考察をさらに進め、当時流布していた『異聞集』、『伝奇』、また『蒙求』、『太平広記』あるいは『霊怪集』、『麗情集』などとの関係についても指摘をした。その上で、羅燁は、一つの話に対して一つの書物だけを参考にしてそのまま引用するのではなく、複数の書物に基づきながら文字を補い、より完成度の高い話を復元しようとしていたことを指摘した。また、基本的には自身で削除や加筆を行わなかったようであるが、白話的な表現が用いられている箇所や、わかりやすい表現に改められた箇所が見られることも確認できた。こうした工夫からは、『酔翁談録』がどのような受容形態を想定して作られたのか、その編纂意図を窺うことができそうである。この問題については、稿を改めて論じたい。

注

(1) 例えば譚正璧氏と胡士瑩氏は『酔翁談録』甲集に見られる講釈の名目に注目して研究を行い（譚正璧『話本与古劇』（上海古典文学出版社、一九五六年）、胡士瑩『話本小说概論』（商務印書館、二〇一一年））、また大塚秀高氏は「話本と『通俗類書』—宋代小説話本へのアプローチ—」（『日本中国学会報』第二八集、一九七六年）において、主に『酔翁談録』を通した宋代の話本について研究を行っている。

(2) ここで言う「同話」とは、『酔翁談録』所収の話と登場人物や地名などが同じで、文字上の異同があるだけの話を指し、「類話」とは、人名や地名などは異なるが、物語の展開が似ている話を指す。

(3) 『類説』は、南宋の曾慥によって編纂された、前代あるいは当代の故事を集めた類書である。自序によると、この書は南宋紹興六（一一三六）年の頃に成立したことがわかる。『四庫全書総目』に「其書体例、略仿馬総『意林』、每一書乃刪削原文、而取其奇麗之語、仍存原目於条首……又每書雖經節録、其存於今者、以原本相校、未嘗改竄一詞」とあることから、曾慥は選択した話に対して節略を行なっているが、参照した祖本の文字をより忠実に写すという方法で編纂したことがわかる。版本については、南宋理宗宝慶三（一二二七）年刊本の序（明天啓刊本前存）に「余旧藏麻沙書市紹興庚申（一一四〇）年所刊本、字小而刻画不精、且多舛誤、意必有統刊大字善本……因取所藏

本、稍加是正、鍍板於郡齋、庶可壽此書……宝慶丙戌（一二二七）八月初吉、古杭葉時書於建中堂」とあることから、『類説』は南宋の頃にすでに刊刻されていたことがわかる。しかし現在南宋の刊本はすでに大部分が散逸した（ただ所収の『仇池筆記』、『隱齋閑覽』、『東軒雜錄』三つの書物の内容のみが残存する）。現在流通しているより古い版本は、明の天啓年間（一六〇五〜一六二七）の刻本、明の嘉靖年間（一五二二〜一五六六）の鈔本、および南宋の宝慶刊本の形を残しているとされる明の有嘉堂鈔本（残存）（清・瞿鏞『鉄琴銅劍樓藏書目錄』に「『重校類説』五十卷、旧鈔本。……明人刊本多刪節、此猶存宝慶本之旧云」とある。）などである。そこで本稿で『類説』を引用する場合は、明天啓年間の刻本を底本として、二つの明鈔本を参照した。

(4) 『緑窓新話』は、南宋の皇都風月主人によって編纂されたと思われる、南宋までの故事、主に女性に関する故事を集めて記録した書物である。『緑窓新話』の成立年代はよくわからないが、中に『古今詞話』の注記が見られることから、『古今詞話』成立以降、つまり紹興十八（一一四八）年以降に成立したことがわかる（李劍国氏『宋代志怪伝奇叙録』（南開大学出版社、一九九七年））。また、『醉翁談録』甲集巻一に「引俎底俎、須還『緑窓新話』」とあることから、この書の成立年代は『醉翁談録』より早いことがわかる。『緑窓新話』所収の内容を見ると、編者は参照した祖本の内容に対して節略を行って編纂したようである。『緑窓新話』の版本について、現存するのは上海

芸文社刊行の『芸文雜誌』第一巻第二期（民国二五年）から第六期（民国二六年）までに掲載されたものと、一九五七年に古典文学出版社によって出版された整理本である。これらによると、現存の『緑窓新話』は巻上、巻下に分かれているが、大塚秀高氏は『繡谷春容』『新話摭粹』と『緑窓新話』の比較を行い、『緑窓新話』の本来の構成は上下巻ともに「遇仙類」などの類に分かれた形であったと指摘する（大塚秀高「『緑窓新話』と『新話摭粹』——万曆時代の『緑窓新話』——」（『日本中国学会報』第三〇集、一九七八年）。現段階で目にしうる『緑窓新話』の版本は、古典文学出版社の整理本のみであるので、本稿は『緑窓新話』を引用する場合、古典文学出版社の排印本を底本とする。

(5) 小松健男「封陟の改作——『太平広記』から『醉翁談録』へ——」（『中国近世小説の伝承と形成』第四章第一節（研文出版、二〇一〇年））に「『類説』や『醉翁談録』に先行する書物、つまりこの両者の祖本が存在すると考えるべきであろう。その祖本は原作を節略したものであったはずである。さらに、この祖本は以下の二つの条件を満たすものであったと考える。まず……祖本は『醉翁談録』や『類説』の本文よりも削除はすくないものであった。次に……祖本は本文の増補も既に行ってもいた」とある。

(6) 小松健男「封陟の改作——『太平広記』から『醉翁談録』へ——」（『中国近世小説の伝承と形成』第四章第一節（研文出版、二〇一〇年））。

(7) 拙稿「『新編醉翁談録』の編纂意識―「談録」を手がかりとして―」(『中国古典小説研究』第二二号、二〇一九年)、「『新編醉翁談録』成立考―書名および編者に対する考察を中心として―」(『中国中世文学研究』第七二号、二〇一九年)を参照されたい。

(8) 『太平広記』の版本について、最も古いものは明鈔本と言われているが、明鈔本は現段階では見られないため、現在容易に見られる談刻本を底本とし、張国風『太平広記会校』(北京燕山出版社、二〇一一年)を参照する。他の書物の版本に関する情報は、初出箇所()の中に記した。

(9) 『紺珠集』は南宋の朱勝非によって編纂されたとされる、前代あるいは当代の故事を集めた類書である。清の陸心源『皕宋楼藏書志』巻五八所収の王宗哲によって書かれた『紺珠集』の序に「紹興丁巳(紹興七(一一三七)年)中元日左承直郎全州灌陽県令王宗哲謹序」とあることから、この書は一一三七年の以前に成立したことがわかる。『四庫全書総目題要』巻一三三「子部三三」に「其書皆抄撮説部、摘録教語、分条件系、以供癡癡之用。体例頗与曾慥『類説』相近。惟『類説』引書至二百六十一種、而此書只一百三十七種、視慥書僅得其半。然其去取頗有同異、未可偏廢。且其所見之書多為古本、亦有足与世所行本互相参討者」とあることから、編者が選択した話に対して節略を行って収録し、その構成は『類説』と類似することがわかる。『紺珠集』の版本について、現存の最も古い、より完全な版本は明の天順年間賀榮刊本であると思われ、他には四庫全書本、

清尤貞鈔本などがある。ここで利用した底本は、明の天順年間刊本であり、四庫全書本を参照する。

(10) 「松」、四庫全書本は「鉛」に作る。

(11) 例えば明の天順年間刊本『紺珠集』の跋に「右『紺珠集』十三卷……及觀曾慥『類説』、亦作自紹興六年、其立言命意、不少差別、意皆踵其書而作也」とあり、寧稼雨『中国文言小説総目提要』(齊魯書社、一九九六年)に「『類説』做『紺珠集』体例、按書摘編旧跡。書末做『紺珠集』中『諸集拾遺』、設『拾遺類総』一目、雜採不知出処諸文而作。少数摘書取自『紺珠集』、小標題也与之相同。多数係採自原書、共收書二百五十二種」とある。

(12) 「郭翰」について、本稿では『太平広記』と『醉翁談録』と比較をした例は一つしか挙げていないが、全体の文字を比較すると、両書の文字はほとんど一致し、『醉翁談録』所収の文字がより詳細である箇所がしばしば見られることがわかる。

(13) 明の有嘉堂鈔本には「歌」字が見られない。

(14) 「連心花」、明の有嘉堂鈔本は「連日心悅」に作る。

(15) 『蒙求』は、唐の李瀚が南北朝時代までの著名人の言行をまとめ、児童教育のために編纂した書物である。『蒙求』の版本については、李瀚自身が注を加えた古注本や、淳熙一六(一一八九)年に刊行され、南宋の徐子光が注を加えた徐注本などの系統に分かれる(早川光三郎「『蒙求』解説」(『新釈漢文大系・蒙求』、明治書院、昭和四八年))。ここで挙げたのは、現存書では最も古のものとされる古注本の、年代がより早い版本

(池田利夫『蒙求古注集成』(汲古書院、昭和六三年)所収)である。

(16) この話の出典について、明抄本注では、「出『搜神記』」とする。

(17) 表の「『酔翁談録』所収の文字と近い書物」、他の書物に見られる同話」の欄には、代表的なものだけを挙げる。記載が簡略であり、本論とあまり関係ない書物は、同話が見られる場合も、ここでは省略する。

(18) 注5を参照されたい。

(19) 『伝奇』は、唐代の裴鏗によって編纂されたとされる、主に神仙や怪異の題材の話を受録する小説集であり、すでに散佚している。南宋・陳振孫『直齋書錄解題』卷一一「小説家類」に「伝奇」六卷。裴鏗撰。高駢從事也。……『唐志』三卷、今六卷、皆後人以其卷帙多而分之也」とあり、また宋代には『伝奇』に関する記載が数多く見られる(『仇池筆記』、『後山詩話』、『類説』など)ため、当時『伝奇』は広く流布していたことが推測できる。『類説』、『緑窓新話』所収の話の中で、出典が『伝奇』と記された話の文字を比較すると、両書は『太平広記』所収の『伝奇』の話より簡略であるが、その箇所は類似するため、同じ系統の祖本を参照した可能性が高いことがわかる(具体的な分析は第二節の「裴航遇雲英於藍橋」の話に関する各書の文字の比較を参照)。したがって、当時は『太平広記』所収のものとは異なり、筋を簡略化した『伝奇』が流布していた可能性があると考える。

(20) 『伝奇』所収の話は宋元の頃にさまざまな書物の中に収録された。例えば本稿の表で挙げた②の話については、他にも『紺珠集』『続補侍児小名録』『姫類侍偶』などの書物に収録され、④の話は『紺珠集』『墨莊漫録』などの書物に収録され、⑧の話は『紺珠集』『白孔六帖』『三洞群仙録』『古今事文類聚』『錦繡万花谷』などの書物に収録されている(李劍国氏『唐五代志怪伝奇叙録』(南開大学出版社、一九九三年))。しかしこれらの書物に見られる該当する話の文字はいずれも『類説』や『酔翁談録』より簡略化されているため、『類説』や『酔翁談録』の編者がこれらを参照した可能性は低いと考えられる。筆者は、当時においては、『伝奇』所収の話を節略して収録した書物(現在すでに散佚した)が流布していた可能性があるかと推測する。

(21) 『異聞集』は、唐代の陳翰によって編纂された、主に怪異譚を受録した書物であり、すでに散佚する。南宋・晁公武『郡齋讀書志』卷一三「小説類」に「『異聞集』十卷。右唐陳翰編。以伝記所載唐朝奇怪事、類为一書」とあり、また南宋・陳振孫『直齋書錄解題』卷一一「小説家類」に「『異聞集』十卷。唐屯田員外郎陳翰撰。翰、唐末人、見『唐志』。而第七卷所載王魁乃本朝事、当是後人剽入之耳」とあることから、『異聞集』は南宋の頃に流通していて、その流通していたものにはすでに後人による加筆が見られ、元来の形ではないことがわかる。『類説』などの書物に収録した『異聞集』の文字の状況について、注19に述べた『伝奇』と類似しているので、ここでは省略する。以

上のことから、当時は注19の『伝奇』と同じように、『太平広記』所収のものとは異なり、筋を簡略化した『異聞集』が流布していた可能性が高いと推測できる。

(22) 宋元の頃に、『異聞集』所収の話が他書の中に収録された状況は、注20に挙げた『伝奇』の状況とかなり類似するため、ここでは省略する。所収の話が具体的にどの書物の中に収録されたかという問題については、李剣国氏『唐五代志怪传奇叙録』（南开大学出版社、一九九三年）を参照されたい。

(23) 『麗情集』は宋の張君房によって編纂され、前代あるいは当代の情愛故事を収録した書物であり、現在すでに散佚している。南宋・晁公武『郡齋讀書志』卷一三「小説類」に「『麗情集』二十卷。右皇朝張君房唐英編古今情感事」とあり、また宋代に成立した『類説』、『緑窓新話』、『塵史』、『茗溪漁隱叢話』など複数の書物の中に逸文が見られることから、この書物は当時広く流布していたと推測できる。

(24) 『通幽記』は唐の陳邵（陳劭ともする）によって編纂された、主に怪異譚を収録する小説集であり、現在すでに散佚する。『新唐書』「芸文志」に「陳邵『通幽記』一卷」とあり、『宋史』「芸文志」および『崇文總目』の中に「三卷」と記されている。宋の『太平広記』や『補侍兒小名録』などの書物には『通幽記』の逸文が見られる。

(25) 『靈怪集』は唐の張薦によって編纂された小説集である。南宋・洪邁『夷堅志』支己卷二「程喜真非人」に「新淦人王生、雖為閭閻庶人、而稍知書、最喜觀『靈怪集』、『青瑣高議』、『神

異志』等書」とあることから、南宋では『靈怪集』は広く流布し、庶民にも好まれた書物であることがわかる。したがって、羅燁が『靈怪集』を参照することは十分可能であったと考えられる。

(26) 南宋において、文人の文集などの中に『太平広記』に関する記載が多く見られるため、南宋では『太平広記』が広く流布したと考えられる。また、『太平広記』の原文を収録した書物を見ると、現在見られる『太平広記』と宋代の『太平広記』の文字は異同があることがわかる。『太平広記』の流布などの問題に関する具体的な論述は、西尾和子氏『『太平広記』研究』（汲古書院、二〇一七年）を参照した。『醉翁談録』の成立年代は宋末元初とされているので、『醉翁談録』所収の「趙旭」や「郭翰」の話の文字が『太平広記』とほぼ一致するのは、羅燁が『太平広記』を参照したからであるという可能性が考えられる。しかし正文で挙げた表の示すように、表の中に挙げられた『醉翁談録』所収の話はほぼすべて『太平広記』に収録されているが、①③の二話のみが『太平広記』と文字が近く、それ以外の話は『太平広記』よりも文字が簡略化されている。このことから、羅燁が読んだ『太平広記』は一部分にすぎなかったと推測できる。宋代には、『太平広記』の節略本がある（『鹿革事類』『鹿革文類』、現在佚）ので、羅燁はこのような節略本を参照した可能性がある。また『醉翁談録』壬集「紅綃密約張生負李氏娘」の小字注に「拠『太平広記』云慈孝寺」とあり、正文の末尾に「事見『太平広記』」とあるが、この話の内容を見ると、成立

年代が『太平広記』より遅いので、『太平広記』に収録されたはずはないことから、大塚秀高氏は、当時の出版者が『太平広記』の規模を縮め、また当時有名な話を挿入し、再編集して元来の『太平広記』と違いがあるものを出版した可能性があるという指摘する（大塚秀高「話本と『通俗類書』——宋代小説話本へのアプローチ」（『日本中国学会報』第二八集、一九七六年）。羅燁はこのような『太平広記』を参照した可能性もあると考えられる。

(27) 「刃」、明の有嘉堂鈔本は「刃」に作る。

(28) 注6に同じ。

(29) 拙稿「『新編醉翁談録』の描写の特徴について」（『中国中世文学研究』第六九号、二〇一七年）。

（もう か、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学中）